

「日の名残り」 カズオ・イシグロ著 土屋政雄訳

(はじめに)

私は、1977年—1979年にかけて父親の仕事の関係により家族でイギリスに住んでおりました。当時私は、中学2年生～高校1年生でした。家族でよく、自家用車でイギリス国内を旅行しました。この小説を読んで目に浮かんできたことは、当時の家族旅行時の田園風景です。そしてこの田園風景は2000年代に入ってから主人とイギリスに旅行をした時も変わりませんでした。今もきっと変わっていないと思います。

この小説では「田園風景」はイギリスの「品格」であるとしています。それ以外に、「イギリスのジョーク」、イギリス人特有の職業と言われている、「執事」の倫理観、いわゆる貴族の振舞いからと思われる「英国紳士」も「品格」としています。その「品格」も第一次世界大戦から第二次世界大戦では、利用され、結果的には大英帝国の栄光を失って行きました。歴史は変えられません。しかし「田園風景」「イギリスのジョーク」は、今でも健在です。小説を読んで、もう一度イギリスに行きたくなりました。

1. あらすじ

この小説は1989年に発刊され、ノーベル文学賞を2017年に受賞しました。小説は1956年のイギリスが舞台。回想シーンは1920年～30年代。ヨーロッパでは、第一次世界大戦の終結、ベルサイユ条約の締結、ナチスドイツの台頭、第二次世界大戦勃発がありました。

主人公は、イギリスにしかない(といわれる)職業の執事、スティーブンスです。35年間敬慕するダーリントン卿が保持していたダーリントン・ホールで働きました。

このスティーブンスが、ダーリントン卿亡き後、ダーリントン・ホールを買い取ったアメリカ実業家(ファラディ)より休暇を勧められて、South-West England を旅行します。その旅行での出来事と、主人公が執事として働いていた1920年～30年代を①自分がいかに執事として職務を忠実にやってきたか②ダーリントン・ホールでともに働いた女中頭のミス・ケントンへの思いなどを回想しながら物語は進みます。

ダーリントン卿は、英国紳士として、ドイツ、フランス、アメリカの要人をダーリントン・ホールに招き、英国の要人と会わせるなど、融和政策に邁進しますが、結果的にはナチス協力者とみられ没落して行きます。

スティーブンスは、職務に忠実になるあまり、ともに働いたミス・ケントンの自分に対する思いに気づきながらも、執事の仕事を優先し、自分も好きだと言えませんでした。旅先で再びミス・ケントンに会うことができたものの、ミス・ケントンより今の居場所は今の主人のところ、と言われ、これまでの人生は何だったんだろうと嘆きます。

2. イギリスの品格について

この小説でキーになる言葉は「品格」dignity と感じました。

小説の中で出てくる私が気になる「品格」をいくつか挙げてみます。

① イギリスのジョーク

●アメリカのジョーク（品格なし）

・休暇中にミス・ケントンに会い行くことをファラディ氏に知られたとき（P24～25）

「おいおい、ガールフレンドに会いに行きたい？その年でかい？」

「君がそんな女たらしとは、ついぞ気が付かなかったよ」

「気を若く保つ秘訣かな？しかし、どんなものかな、そんないかがわしい逢瀬をぼくが取り持つというのは…」

●イギリスのジョーク（品格あり）

・「今朝がた、カラスみたいな大声を出していたのは、あれは君じゃなかるーね、ステイーブンス？」（アメリカのジョーク：品格なし）→「カラスというより、ツバメではございますまいか？それ、渡りの習性がございますから」（朝騒いでいたのはジプシーであったため、ステイーブンスそのように切り返した：品格あり）（P27～28）

② イギリスの田園風景

・旅先のソールズベリーにてのステイーブンスの言葉。

「イギリスの風景がその裁量の装いで立ち現れてくるとき、そこには、外国の風景が一たとえ表面的にどれほどドラマチックであろうとも決して持ちえない品格がある」「この品格は、おそらく「偉大さ」という言葉で表現するのが最も適切でしょう。今朝、あの丘に立ち、眼下のあの大地を見たとき、私ははっきりと偉大さの中にいることを感じました」「この国土はグレートブリテン、「偉大なるブリテン」と呼ばれております」（P41～42）

③ イギリスの執事（品格を身につけるべく努力をすることが職業的責務）（P63）

・「執事はイギリスにしかおらず、ほかの国にいるのは、名称はどうであれ単なる召使だ、とはよく言われることです。（中略）大陸の人々が執事になれないのは、人種的に、イギリス民族ほど感情の抑制がきかないからです」（P61）

・偉大な執事とは何か。「入会申請者がみずからの地位にふさわしい品格の持ち主であることである」（P48）超一流な執事しか入会させない「ヘイズ協会」の定義。

・「偉大な執事は、紳士がスーツを着るように執事職を身にまといます。公衆の面前でそれを脱ぎ捨てるような真似は、たとえごろつき相手でも、どんなに苦境に陥ったときでも、絶対に致しません。それを脱ぐのは、みずから脱ごうと思った時以外なく、それは自分が完全にひとりだけのときにかぎられます。まさに「品格」の問題なのです」（P61）

・旅先のモスクムの村で出会ったカーライル医師に「品格」とはなにか、と問われてのステ

イーブンスの返答：「これは、なかなか簡単には説明しがたい問題でございますが」「結局のところ、公衆の面前で衣服を脱ぎすてないことに帰着するのではないかと存じます」

・スティーブンスの父からの話し：執事として雇用主とインドにわたって、食堂に迷い込んだトラを撃ち殺し、その後何事もなかったようにふるまい、イギリス時代と変わらぬ水準を維持し続け、晩餐の準備を進めた執事（P301）

④ 利用されるイギリスの「品格」

・ダーリントン卿が名付け親であるカーディナル氏からの（コラムニスト）の忠告の言葉：「ダーリントン卿は紳士なんだよ。そこからすべてが始まっているんだ。卿は確かに紳士だ。そしてドイツとの戦争を戦った。敗れた敵に寛大に振舞い、友情を示すのは、紳士としての卿の本能のようなものだ。（中略）やつらが卿のその高貴な本能をどう利用したか。それを巧みに操って、高貴なるものを何か別の自分たちのきたない目的のために利用できるものに変えてしまったんだ。（中略）スティーブンス」

「今日の世界は、高貴な本能を大切にしてくれるようなきれいな場所じゃない。君も見ているんだろう、スティーブンス？やつらが高貴なるものをいかにして操り、ねじ曲げてしまうか。（中略）」

3. 小説の中でいちばん好きなどころ

敬慕した元雇い主ダーリントン卿の没落、好きであったミス・ケントンとの再会とかなわなかった恋。「品格」を保ち続けることが、価値あることだと信じてきた自分の人生は何であったのであろうか、と嘆くスティーブンスはウェイマスで出会った元執事の言葉に救われる。

「・・・いいかい、いつも後ろを振り向いていちゃいかんだ、後ろばかり向いているから、気が滅入るんだよ。何だって？昔ほどうまく仕事ができない。みんな同じさ。いつかは休む時が来るんだよ。わしを見てごらん。隠退してから、楽しくて仕方がない。・・・人生楽しまなくっちゃ。夕方が一日でいちばんいい時間なんだ。脚を伸ばして、のんびりするのさ。夕方がいちばんいい。わしはそう思う。みんなにも尋ねてごらんよ。夕方が一日でいちばんいい時間というよ」（P350）

この場面では2年前に定年退職をし、現在継続雇用で勤務している自分とスティーブンスが重なりました。小説ではこの後、スティーブンスは、「執事」としての「品格」を保ちながらも、新しい雇い主であるアメリカ人に対してアメリカのジョークを勉強して学ぼうと、イギリスのジョークの「品格」にとらわれず、前向きに生きようと気持ちを切り替えます。私もスティーブンスのように、なろうと思いました。

以上